

忌憚のない反論が、多くの点にわたって寄せられることが期待される。しかし、最大の問題点は、何といたっても共同体の段階論と類型論との関連であろう。おそらく、地理的・自然的条件によって規定される共同体の現実的あり方の相違を、何らかの形で理論化しようとすることに異論はないであろう。しかし、本書においては、本源的な所有の諸形態の類型論的理解が、無階級社会から階級社会への移行を、総体的な奴隷制、奴隷制、ないし農奴制が民族的特性によって並列的に発生してくる過程として描き出す、きわめて大きな構想の根拠としての地位にまで高められているのであって、そこには大きな疑問を感ぜずにはいられない。

ここで、私自身の関心から、西ヨーロッパ封建制の例を取り上げることをお許し頂きたい。著者は、主としてソ同盟の歴史家の業績を手がかりとしながら、西ヨーロッパ封建制の成立過程を、ゲルマン人の農業共同体の中から小経営的生産様式が確立し、それに伴って「完全アロッド」という形態で私有が発生したのちに、はじめて封建的大土地所有が発生するというように整理する。そして、これが、無階級社会から直接に農奴制が形成された重要な例としての地位を与えられている。しかしながら、最近の研究動向は、西ヨーロッパにおいても、封建制が成立してくる前提として、やはり奴隷制的生産関係が存在していたことを示しているように思われる。フランス学界でいう「村落首長制」、西ドイツ学界でいう「豪族支配体制」の内容を、ただちに奴隷制と見なすことはもちろんできないとしても、これらの定式化が、前封建的な支配＝隷属関係が西ヨーロッパでも古くから存在していたことを強調した意義は、無視しえないであろう。また、メロヴィング期からカロリング期の諸史料は、西ヨーロッパ封建制の成立が、その基礎的な局面の一つとして、奴隷の農奴への量的上昇を伴っていること、封建的大土地所有の形成が、独立農民層ばかりではなく、前封建的大土地所有をも否定する過程であったことを示している。封建制以前の西ヨーロッパ社会において奴隷制が果していた役割の程度を実証的に明らかにしえない限り、これを端的に奴隷制社会と規定することはためらわざるをえないとしても、少なくとも、そこで行なわれる階級分化が主として奴隷制を発生させていたような段階の社会であったことは、確実であろう。さらに視野を拡げた場合、西ヨーロッパ封建制の成立を、奴隷制を基礎としていた古代地中海文明からの継承関係をぬきにしては、およそ語りえないことも明らかである。例えば封建制形成の基地となったロワール・ライン間地域におい

ては、封建的大土地所有は、たしかにローマ期の奴隷制的大所領との断絶の上に形成されたが、しかし、耕地など、後者の生産力的遺産を継受して成立している場合が多いのである。〔詳細については、拙稿「中世初期の社会と経済」、『岩波講座、世界歴史』7を参照されたい。〕西ヨーロッパ封建制の成立は、やはり、何らかの意味で先行する奴隷制的生産様式を前提としないかぎり、充分には理解できないように思われる。

以上の点は、階級社会への移行が奴隷制と農奴制を並列的に成立させるという立論に西ヨーロッパ封建制を引証することに対する、当面はささやかな疑問にすぎないかも知れない。しかし、この例は、硬直的な段階論の克服は、必ずしも共同体の理解において段階論と類型論を並列させることによってではなくても、あくまでも段階論を基礎とした上で、不均等発展の同時存在を媒介として、生産力⇔生産関係が異なった地理的・自然的環境のもとに継承されていく過程を構想することによっても、充分に可能であることを示しているのである。著者は「大塚史学」をしばしば検討の対象とし、その批判とくに1章をあてている。この批判は、「大塚史学」が共同体の諸形態を、1系列的・単線的に把握していることに集中されている感じがあるが、「大塚史学」に含まれている不均等発展の同時存在を出発点とする諸構想にも目を向けない限りは、批判としては片手落ちであろう。無階級社会⇔階級社会の移行における多様性を、いったいどのような理論的次元で問題とすべきなのか、より立ち入った吟味が望まれるのである。

【森本芳樹】

Д. П. Кайдалов

「労働転換法則および人間の全体的発達」

Д. П. Кайдалов, Закон перемены труда и все-стороннее развитие человека, Москва, Изд. «Мысль», 1968, 320 стр.

社会生活の社会主義的改造がなしとげられた段階では、 Kommunismusの問題は否応なしに経験的実在にかんする科学へと転生してゆかざるをえない。「分業の揚棄」とか「人間の全体的発達」とかの Kommunismusの本質にかかわる問題もまた例外ではない。それは、 Kommunismusを現実生産しつつある人々にとっては、たんなる哲学

的科学的対象にとどまるわけにはいかない。事実、これらの問題は、社会主義諸国において経済学、社会学、教育学、あるいは自然諸科学等の経験科学の領域へと移植されるべく再提起されているのである。本書もまたそうした努力のひとつであって、著者ドミトリー・ペトローヴィチ・カイダロフは、1960年代にソ連邦でおこなわれた「分業と人間」をめぐる科学的討論のなかで、ストルミリンの独創的な問題提起(『 Kommunismus建設の途上で』、モスクワ、1959年)を継承しつつ、B. コルニエンコ、B. エリメエフなどととも、とくにきわだった所説を発表したひとりである(ストルミリンは本書に序文をよせて、高く評価している)。これらの人々の構想する Kommunismusの特徴は、スターリン的な生産関係(=所有関係)主義を排して、一面ではエンゲルスの分業史観に注目しつつ、他面ではマルクスが大工業分析からひきだした主要な「理論的帰結」、すなわち大工業的生產様式の發展傾向が必然的に労働分割(Arbeitsteilung)から労働転換(Arbeitswechsel)への労働組織原理の移行を結果し、これが社会化された人間の人格の普遍的発達の現実的基盤となるという認識を復位せしめようとする点にある、といえる。コルニエンコ『 Kommunismusへの移行期における社会的分業』(1963年)やエリメエフ『 Kommunismusおよび社会的生産力としての人間の発達』(1964年)と同様、カイダロフのこの著作は、上記の主題と所説をソ連邦における経済的・社会的変動の渦中に生起する経験的事実にてらして多面的に論究し、根拠づけようとするものであり、そのかぎりではひとつの明確な結論に到達しているようにみえる。

本書は、全11章からなり、労働分割から労働転換への移行過程の原理的研究(1~4章)からはじまり、物質的生産内部における労働転換法則の作用形態の経験的事例(5章)、労働転換と分配の平等(6章)、工業的労働と農業的労働との転換(7章)、知的労働と筋肉労働との転換(8章)、労働転換と政治的國家の死滅(9章)、などの研究を経て、労働と人間と Kommunismusにかんする総括的考察(10~11章)によってむすばれている。

カイダロフは、 Kommunismusを生産する人類の歴史的発展を「労働の弁証法」とよび、これを認識過程の弁証法になぞらえる。すなわち、「労働の全發展史は、その発生の瞬間から、世界の認識と改造の歴史を特徴づけるのと同様の弁証法的諸段階を通過する」(285ページ)。人間の認識は、諸現象の混沌たる全体的表象から出発しつつ、しだいに諸現象の個々の部分(側面)およびそれらの静態的相互連関の認識へとすすみ、さいごに、自然

的・社会的・精神的世界の全体を不断の運動・変化・発展において把握する。いうまでもなく、第1段階は、単一の哲学的世界像をうみだした古典古代的認識に対応し、第2段階は、一方における形而上学的全体認識と他方における部分的認識材料の蒐集と蓄積の段階であり、第3段階は、全自然の弁証法的認識に相当する。ところでカイダロフによると、こうした認識過程の段階的進化は、もともと対象的世界の認識と改造の唯物論的根拠である人間の对象的活動(=労働)自体の發展過程に内在する弁証法の反映なのである。原始的人間に固有の活動の普遍性は、社会的分業の発生と展開をつうじて不可避免的に崩れ、一方には社会的生産諸力の上昇が、他方にはつねに生活の主体である人間の分割=部分人間化が進行する(分業の2面性)。しかしまた、分業の發展の極点において社会的労働組織が労働分割をとまわず、それとまっこうから対立する原理によって再編成される必然性と可能性が発生する。それゆえにこそ、手工業的労働から機械的労働への進化のはたす歴史的役割は、資本による世界支配(近代ブルジョア社会)を超えるのであって、機械制大工業がうみだす固有の傾向=「労働の転換・機能の流動・労働者の全面的可動性」(マルクス)こそが、 Kommunismusの認識にとって決定的なものとされるのである。これは、人間の原始的普遍性への単純な復帰であるはずはなく、労働の全發展過程を揚棄する弁証法的飛躍なのである。原始的人間にとって労働分割は不可能であったとすれば大工業時代はそれを不必要とするのである。とはいえ、階級的分業としての資本独占はこの傾向と原理的に対立し、労働転換法則の恒常的作用をさまたげるのであって、労働者階級による「政權奪取」だけがこうした根本的変革への道をひらくこともまちがいない。この点からみて、カイダロフが社会主義工業の実例によってしめす労働転換の諸形態は、とくに注目に値しよう(5章、133~159ページ)。すなわち、ソ連邦産業にみられる革新的労働組織としての複合労働組織の形成過程は、労働の技術的・社会的条件の変革が分業法則をどのようにうちこわすかを克明に例示してくれるし、いったい社会的労働の共産主義的組織とはどのようなものでありうるかをある程度示唆してくれる。

さらにまた、労働転換法則が分業法則にかわる新たな労働組織原理であるとするれば、さしあたりそれが物質的生産の内部で発生するとしても、社会成員のあらゆる活動部面をかならずとらえなければならないし、とらえるはずのものである。いわゆる精神労働と筋肉労働との分裂の揚棄という問題は、労働転換法則が物質的生産の領



域外へと展開するさいの結び目となる。カイダロフは、一方において、コミュニズムへの前進とともに頭の労働と手の労働との本質的差異だけがなくなると考えるスターリンのテーゼを批判するとともに、他方において、いっさいの手労働(筋肉労働)が知的・精神的労働へと転化してゆくと考える楽観主義をもきびしく批判する。問題をコミュニズムの唯一の主体としての全体的個人の形成という観点からみるかぎり、物質的生産の枠内で論ずるわけにはいかない。在来(の)理解、すなわち、労働者やコルホーズ農民の文化的・技術的水準を技師や技手の水準にまで引きあげることによって問題を処理しようという考え方では、物質的生産の領域外でおこなわれる(しかも物質的生産よりも急速に拡張するであろう)知的・精神的労働、すなわち科学的・芸術的・文化的等々の労働がほとんど視野にはいらなくなるし、まして頭の労働から手の労働へという逆の労働転換などおおよそ問題外に脱けおちてしまう。カイダロフは、手労働の人間形成的役割を執拗に根拠づけようところをみており(250~260ページ)、「労働能力あるすべての人たちが労働時間の一部を物質的生産領域へ投入するような」(250ページ)方向での労働組織の変革を提言している。

物質的生産の領域外での労働転換法則としてカイダロフが1章をあてているのは、いわゆる「政治的国家の死滅」にかんする問題である。かれは、ここでも在来の解釈からの脱皮をこころみている。すなわち、政治的国家の本質を階級分化のうちにもとめ、階級分化の原因を所有関係のうちにもとめるありふれた立場から、階級分化の「いっそう深い原因」(274ページ)としての分業に着目しつつ、政治的国家死滅の究極の根拠を「分業の除去」のうちにもとめる立場への転換を主張する。「このような結論は——とかれはいう——この問題をあつまっているわが国の作家たちの著書のなかではまったく定式化されていない。2・3の人々はただ分業のふるい形態が克服されるということだけに同意する。しかし、ふるい形態の一扫とともにふるい諸階級も一扫されよう。もし、何らかの新しい分業形態がのこるならば(それがどんな形態であるかは誰にもわからないが)、すなわち諸階級への社会の分裂の基礎がのこるならば、新しい諸階級もまたのこらざるをえない。諸階級への社会の分裂の基礎(すなわち分業)がのこるのに諸階級は消滅すると語るの、はなはだしい脊理であろう」(同)。政治的国家から共産主義的社会自治への移行は、たんに所有関係の変化だけではなく、労働そのものの社会的性格の変革、いいかえれば、労働転換法則にもとづく全社会成員の国

家的活動への参加によってのみ実現される、とカイダロフは考える。

本書全体から気付くことは、第1に、マルクスが『資本論』第1巻第13章の長大な大工業分析から帰結し、それをもって新しい社会組織と主体形成の現実的基盤と考へたにもかかわらず、わが国では今なお耳なれない範疇であり法則であるところの「労働転換」が、理論的ならびに実証的研究の主題として多面的に論究されている、という事実である。これこそ、「失われた範疇」の最大のものではないのか。このことは、唯物論的歴史観や経済学批判体系における分業範疇の在来のあいまいな扱い方とうらはらの関係にあるといえる。第2に、われわれは、「分業と人間」にかんする実践的問題提起のいまひとつの実例を中国的「文化革命」のうちにみることができ、そこで特徴的な「技術と労働」、「頭と手」の単純きわまる対置(あるいは、技術や知的労働にたいする蔑視とでもいった方がよいのかもしれない)、したがって分業問題への反動的態度、等々とくらべてみると、カイダロフにみられる研究の視点、方法は、「大工業的生産様式の共産主義的本性」という科学的コミュニズムの根本命題をふまえているかぎり、何ばいもの健全性をそなえているといわざるをえない。

ただ不満としてのこるのは、1、エンゲルスの分業史観と経済学批判におけるマルクスの歴史認識とのあいだに感ぜられるある種の不斉合を問題にもしていない点(一般にソヴェト・マルクシズムではこの種の問題はないようであるが)、2、物質的生産内部における労働転換法則の実証分析(複合労働組織)がわずかに石炭産業にかぎられているし、しかも材料がかなりふるいということ、3、本来の知的・精神的生産(科学・芸術など)の内部での労働転換がどのように形成されるのかについての論究がまったくないこと、等々である。とくに最後の点は、ストルミリン→カイダロフにたいする批判者の側から最大の難点として指摘されているのであるから、とくと論究してほしかった点である。

【中野雄策】